

# 3

## 教師から酪農家へ、“べつせかい”への転身



山口 雄司  
YAMAGUCHI Yuji 酪農家

北海道別海町は日本一の生乳生産量を誇り、酪農が基幹産業であるが、もとは地域特有の厳しい気候に苦しんだ町であった。そんな別海町に移住し酪農を営む彼。酪農とは全く別の世界で育った彼は、一体どのようにして、酪農家への道を歩んでいったのだろうか。

### 酪農王国べつかい

別海町は北海道の東部、根室半島のつけ根あたりに位置する広大な町です。その面積は約1,320km<sup>2</sup>。これは東京23区の2倍以上の面積で、その約半分が牧草地です。年平均気温5.4℃という冷涼な気候を活かした草地型酪農が盛んな町で、生乳の生産量は日本一を誇ります。人口およそ15,000人に対して牛の数は11万頭以上、名実ともに酪農王国なのです。町の東側にはオホーツク海が広がり、サケ・ホタテ・ホッカイシマエビなどが有名です。

北海道の多くの場所がそうであるように、別海町も本州からの開拓者たちによってその礎が築かれました。畑作のための広大な農地を手に入れ、豊かな生活ができることを夢見て移住した開拓者たち。しかし、遅霜や早霜、異常低温や季節外れの降雪など、この地域特有の

厳しい気候のために十分な作物がとれず、多くの人々がこの土地を離れていきました。根室地方の冷害・低温に耐えられる作物とそれに適した農業は何か。それは広大な草地と寒さに強い乳牛を活かした酪農しかなかったのです。

人の手と馬の力で少しずつ進められていた酪農への転換でしたが、昭和30年代に国策として始まった「パイロットファーム事業」と、昭和40年代後半から進められた「新酪農村建設事業」によりその開発は一気に進み、別海町は整備された広い牧草地と、機械化された大型経営の農場が続く現在の姿になりました。

### 農業人への憧れ

神奈川県出身の私の実家は農家ではなく、ごく普通のサラリーマン家庭に育ちました。都内の大学を卒業後、10年間東京都の小学校に教諭として勤めていました。子どもの頃から農業には興味がありました。農家の友だちがいて、いつ遊びに行ってもお父さんとお母さんが家に来て明るく話しかけてくれて、なんだか羨ましく感じていたのを覚えています。でも、農家は特別な仕事のように見え、あくまでも「継ぐ」ものであって、素人が途中から始められるようなものではないという先入観を持っていました。

教員時代、給食の時間でのことです。私が小学生の頃、給食では時間内に全員が同じ量を食べることが当たり前で、今では考えられませんが「お残り厳禁」でした。今の先生は決して食べきることを強要することはありません。食べられる量を食べればいいし、食べられな



写真1 別海町のカントリーサイン。やっぱり牛



写真2 別海町酪農研修牧場。2種類の牛舎（つなぎ・フリーストール）の他、研修生住宅や研修館がある



写真3 別海町上風連地区。学校を中心に農家と牧草地が広がる

ければ残せばいいという考え方です。昔の給食指導は少し異常でした。ただ今は、献立によって子どもたちの食べ方に違いがありすぎるのです。カレーライスやスパゲッティのような子どもたちに人気メニューの時は先を争っておかわりをするのに、煮物や魚などの時は平気で残してしまう。そんな様子には心が痛みました。

何とか食べ残しを減らそうと、給食の材料を生産する農家や漁師さんの思いや苦勞などを知ってもらおうとしたのですが、なかなかうまく伝わりません。その時、私たちの食卓と食料生産の現場が遠く離れてしまっていることを改めて実感し、実は自分自身もよく知らない世界であることに気づきました。知らない世界があるのなら知ってみたい。そんな思いが強くなり、いつしか「農家になってみようかな」と思い始めたのです。

それから、自分の子どもが生まれたことも大きかったです。野山を遊び場にして、のびのびと育ててもらいたい。子どものはしゃぎ声や泣き声を気にせず、自然と共に生き、おおらかに子育てがしたい。それを実現するには、都会よりも隣近所が離れている田舎の一軒家の方がいいだろう。そう思ったのです。

農業と一口に言っても様々な分野がありますが、実は酪農は選択肢に入っていませんでした。牛という「生き物」を扱う農業であること。とても難しそうだし休みもなさそう。他の農業分野と比べたら間違いなく初期投資も大きい。しかしいろいろ調べてみると、意外にも酪農分野への新規就農者は多いことがわかりました。動物は嫌いじゃないし、どうせやるなら難しい方がやりがいがありそうだし、などと考えているうちに酪農への興味が高まっていきました。どうですか、サラリーマンから牧場主になるなんて夢みたいじゃないですか。情報を集めれば集めるほど酪農への思いは強くなっていきました。

### 別海町酪農研修牧場へ

酪農といえば「牛が広い放牧地でのんびりと草を食んでいる」イメージですよね。そのイメージを現実にするなら「やっぱり北海道だろう」という単純な考えで、当時は東京にもあった新規就農のための相談窓口である北海道農業担い手育成センターに向かいました。そこで紹介されたのが別海町にある酪農研修牧場なのです。

有限会社別海町酪農研修牧場は、都会から来た就農希望者に酪農のいろはを教え、一人前の酪農家として離農後の農場に入植させるための施設です。1997（平成9）年に開設されたこの牧場は夫婦で入所するのが基本で、現在までに72組が研修を終え、別海町をはじめ近隣の市町村に新規就農しています。

研修生は研修牧場の臨時職員として採用され、月々の給与をもらいながら研修に励みます。研修期間は原則3年間ですが、入所前の酪農経験や技量に応じて2年間または1年間に短縮されることもあります。日常の作業に加え、定期的に座学の時間もあるので、酪農に関するほぼすべての知識や技術を計画的に学ぶことができます。これは、一般の農家実習ではなかなか難しいでしょう。それから、なんと言っても同じ目標をもつ仲間と協力し合い、切磋琢磨して研修することができます。全国から集まる研修生は、みんな社会人として様々な経験をしてきた人たちなので、とても良い刺激を受けながらの研修になります。研修中の収入は決して多くはありませんが何とかやっていけます。田舎は必要以上にお金を使う場所はありませんから。

私の場合は2年間で研修を終えました。振り返れば概ね楽しい研修期間でしたが、何しろすべての事が生まれて初めてなので、一つ一つの仕事を覚え、その意味を理解するのは大変な苦勞もありました。一番きつ



写真4 上風連地区運動会。大人も子どもも一緒に楽しむ一日



写真5 夏祭り。みんなでおめかし



写真6 牧草の収穫作業。夏は一年で最も忙しい季節

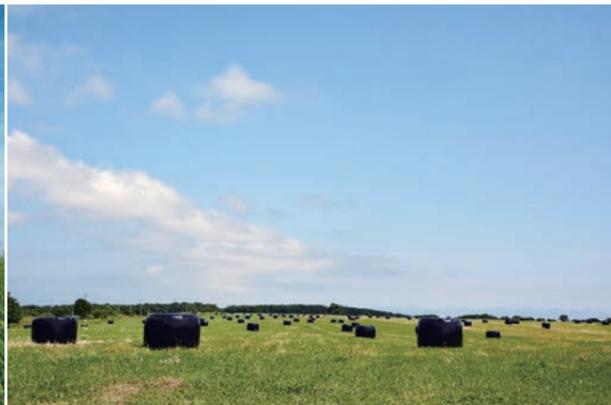


写真7 収穫した牧草。牧草ロールをラッピングして発酵させる。牛舎内で牛に与える大切な飼料

かったのは「早起き (!)」。毎日午前3時半起床の生活に、体が慣れるまでは本当に大変でした。今でも朝は苦手ですが。

### いよいよ新規就農

研修牧場での研修を終え、2000 (平成18) 年に別海町南部の上風連という地区に就農しました。ここには72戸の酪農家があり、先述した昭和50年代の新酪農村建設事業によって大きく発展した酪農専業地域です。直前まで農家経営をされていた所を引き継ぐような形で就農できたので、補修や改修の必要はあまりなく、お金の面で助かりました。とは言っても、牧草地や宅地などの広大な土地と牛舎などの施設を購入するには、莫大な資金が必要となります。乳牛の導入やトラクターなどの農業用機械も必要です。これを助けてくれる仕組みが、北海道農業公社の「農場リース事業」でした。

農場リース事業とは、離農者から農地と施設を北海道農業公社が一括して買い取り、必要な補修・改修を施して、農地・農機具・生産施設・乳牛をリースするという

ものです。リース期間は5年間で、その間は毎年のリース料を支払いながら経営の安定を目指します。その後、リース期間終了時に融資を受けて一括買い上げするという仕組みです。それ以降は借入金を返済しながら経営を続けることとなります。このような仕組みがあるおかげで、少ない資金で初期投資が大きい牧場経営が可能になるわけです。



写真8 放牧風景。5月末から10月までの日中は外で青草を食べる

14年前に40頭のリース牛から始まった牧場も、今では120頭を抱えるほどになりました。このあたりでは、家族経営としてはごく平均的な規模です。振り返れば忙しい毎日を積み重ねているうちに今日に至ったようなものですが、決して順風満帆ではありませんでした。自分の未熟さ故に今まで何頭の牛を失ったことか、乳価の下落と飼料代の高騰で大赤字の年が続いたこともありました。一日中働いても思うように利益が出ず「自分は酪農に向いていないのでは」と気分がふさぎ込んだ時期もよくありました。

一般的に同業他社は「ライバル」を意味しますが、酪農家では「仲間」を意味します。規模拡大して先進的な酪農を目指す人。恵まれた草地資源を活かした放牧酪農を理想とする人。家族経営の小規模酪農から法人経営の大規模酪農まで、それぞれが目指すスタイルでやっていけるのが酪農の良さではないでしょうか。隣近所がみんな酪農家だからこそ、楽しさも苦しさも互いに理解し助け合うことができる。互いに干渉はしないけれど気を配り合って、必要ならば躊躇なく手を貸す。

「なんもなんも」という北海道弁があります。「お互い様、どうってことないよ。だから気にしないでよー」というような意味でしょうか。だれもがそんな言葉を掛け合える、そんな雰囲気がこの別海町上風連地区にはあります。私も沢山の人の助けられ、励ましてもらって頑張ることができました。地域の住民全員を「仲間」と思えるなんて、こんな素晴らしいことはないです。

### やっぱりここが一番だべさ

「田舎暮らしの良さ」って、なんでしょう。自然に囲まれて生活できること。草木の色づき方や野生動物の行動、夜空に浮かぶ星座の種類、遠くから吹いてくる風のおい、そして匂を迎えた美味しい食べ物、そんなものから季節の移ろいを肌で感じることができます。同じ喜びや苦勞を分かち合える仲間と暮らせること。普段は忙



写真9 放牧中の牛。やっぱり外は気持ち良さそう



写真10 搾乳作業。毎日休むことなく朝と夕方の2回



写真11 別海生まれの長男。子どもだって貴重な働き手



写真12 トラクターを乗りこなす妻。都会暮らしの頃からは考えられない姿

しくてなかなか顔を合わせることができないけれど、何かやるとなったら「わあーっ」と力を合わせてしまう。地域住民が総出で行くお祭りや運動会・文化祭などは子どもからお年寄りまで、笑顔が集う一日となります。ここには「地域の子どもは地域で育てる」そんな素地があります。素敵だと思いませんか。

都会を飛び出した時、自分の選んだ道は果たして正しいのか、経営に失敗し家族で路頭に迷うことになるのではないかと、正直不安でいっぱいでした。自分たちの未来予想図を描くのは難しいことですが、これからも身の丈に合った規模の酪農を続けていきたいと思っています。少しでも仕事にも気持ちにも余裕ができてきましたので、今までの自分の経験を活かして、第二のふるさとである別海町や上風連地区に貢献したいですね。このように、田舎暮らしの良さや楽しさ(苦勞も)、そして酪農の素晴らしさを一人でも多くの人に伝えることもその一つなのでしょう。少しは参考になりましたでしょうか。

<参考資料>  
別海町酪農研修牧場ホームページ (<http://betsukai-kenboku.jp/>)

<写真提供>  
写真1,6~12 筆者  
写真2 別海町役場  
写真3~5 上風連地区連合町内会